

執筆者紹介

永野 美菜	本学欧米言語文化専攻博士前期課程修了（2015年3月）
青木 萌	本学非常勤講師
横山 昌子	本学非常勤講師
胡 杰	本学中国語文化専攻博士後期課程2年
楊 洲	本学中国語文化専攻博士後期課程1年

編集後記

一昨年にも増して昨年は、人口知能が様々な分野で注目された。人口知能を備えたロボットが、危険物処理はもちろん外国語の翻訳も高齢者介護や自動車の運転もする。チェスや将棋も学習し、囲碁のトップ棋士をも破ってしまった。こうなると我々人間は何故こんなに苦労して読み書きそろばんを覚えなさいといけなのだろうと悩んでしまう。研究論文を代わりに書き上げてくれるロボットが出現するかもしれない。それは夢のようでもあり、我々研究者にとっては悪夢でもある。

しかしながら、その悪夢はまだ当分は現実化しそうにない。長年人工知能を研究してきた国立情報学研究所の新井のり子教授が昨秋、人工知能の限界を見極め、人間の能力との違いを明らかにした。結論として人工知能は「意味を理解できない」のである。

意味を理解できないというのは、例えば、「グラスコップを落とす」と「コップが壊れる」ことを関連付けられない。数の計算だけを行う人工知能は、その二つが連続して起きることが多ければ統計処理により関連付けるだけである。従って統計的に起きる数が多ければ全く関係ない事柄、例えば「雨が降る」と「試験で100点を取る」を関係付ける。「雨が降らなくても100点を取る」ことを受け入れられない。「コップを落としても壊れないことがある」と人間は悩み考え、「落とすことの衝撃で壊れる」「衝撃が小さいと壊れない」ということへ導き、さらには「皿も落とすと割れる」ことを予測する。つまりは「ものが落ちる」ことの意味を問い、「ものが壊れる」ことの意味を問う。一つ一つの事柄の意味を理解するからこそ関連を考え「何故？」が沸いてくるのである。

人口知能はまた、喜びも悲しみも、好きも嫌いも、興味がわくという感情も持つことができない。心の奥から沸いて来る好奇心を感じることもない。更にはその感情の深さは人によって様で、悲しみが癒えることも深い愛情が日々あせることも知らない。膨大なデータを統計的に瞬時に処理し、その結果から数による選択はできるが、それに対しロボット自身がどういう感情を持つか、興味を持っているかなどわからない。というより、そういうものはないのである。

「人間は考える葦である」と言ったのは17世紀フランスの哲学者パスカルである。400年近く経って、人間はようやくその意味を知ったのである。

ということで、新たな発見に胸躍らせることも、答えの出ない問いに考え悩み抜くこともしない。そんな成果を形にしたこの論集は、ロボットは逆立ちしても書けないのである。

（外国語学部准教授 片岡喜代子）

投稿規定

1. 投稿は本大学院に在籍する者か、本学教員に限る。ただし、指導教授の推薦により、博士前期・後期を修了した後の2年間は投稿できるものとする。
2. 論文は原則として、専攻分野に関わる領域を対象としたものとする。
3. 完全原稿を提出すること。

- ・ 長さは、日本語・中国語の場合はA4版（横33字、縦29行）で20枚（2万字程度）、その他の言語の場合はA4版（横68字、縦25行）で30枚程度とする。
- ・ 原稿には英文の標題をつけ、ローマ字表記の名前を明示する。
(例)

Verbal Irony and Echoic Use KANAGAWA Tarou

The phonological system of Hum mong ja hoe KANAGAWA Hanako

- ・ 校正は再校まで執筆者が行うこととし、その際、コンピューター処理に関わるもの以外の加筆・削除は認めない。
- ・ 原稿を提出する際は、次の3点を提出すること。

ア) 完全原稿を出力したもの 1部

イ) 原稿表紙（名前・所属・連絡先・論文標題を記した一覧表）
1部

ウ) 外部メモリ（USB等）にア)とイ)を保存したもの（後ほど返却）

4. 原稿提出締め切り：11月30日（厳守）

（執筆者は7月31日までに編集委員に提出論文の概要と予定字数を予告すること。）

(2011.12.14 研究科委員会承認)

神奈川大学大学院
言語と文化論集 第23号

2017年2月 印刷

2017年2月 発行

編集発行 神奈川大学大学院
外国語学研究科
(横浜市神奈川区六角橋3-27-1)

製 作 共立速記印刷株式会社